

# 岩崎彌之助と静嘉堂文庫初代文庫長・重野成斎

河野 元昭

与君素契在斯文 君との素契は斯文にあり  
君已騎龍向帝閣 君すでに龍に騎して帝閣に向う  
扶病来供香一瓣 扶病来り供す香一瓣  
猶析息壤了前言 なほ息壤を析つて前言を了せん(註一)

## 一

静嘉堂文庫を創始した岩崎彌之助の伝記は『岩崎彌之助伝』にまとめられている(註二)。本書は三菱第二代社長彌之助の正伝と称すべき一書、序文に「既刊諸伝の例に従ひ徒らに先人の過褒にわたることを避け、専ら根本資料に依拠して事実を直書することを旨とした」とある。「既刊の諸伝」とは、三菱初代社長彌太郎、三代久彌、四代小彌太の伝記をいう。『岩崎彌之助伝』によれば、彌之助は学問を好み、古い文芸に尊敬の念を抱く人間であった。本書には、師重野成斎のつぎのような言葉が伝えられている。

彌之助男は米国に遊学後は家事の繁きに逐わるる身となりしも、研学の精神は少しも衰えず、詩歌文章はもとより漢文学の素養を怠らず。深く造詣する所ありしに拘らず、少しも銜学の風なく、その所作の詩歌は専門家も及ばぬものありしが、自ら謙りて仮りにも文芸に嗜みあることすら他人に知らるるを求めざりしかば、世人は男の権勢富貴の一面を知るも、かかる学殖あるを心づかぬも多かるべし。好学かくの如くなれば、書籍に対しては千金を惜しまず、蒐集につとめられたり。

のちに述べるような彌之助と成斎の関係を考えれば、ここに若干の修辭があることは、改めて指摘するまでもないであろう。しかし、これまた後述の

陸心源旧蔵古典籍を中心とする彌之助蒐集古典籍群と、それを基礎として形成された静嘉堂文庫に思いを馳せれば、彌之助に「研学の精神」が豊かに具わっていたことは、火を見るより明らかだといふべきである。

新たな近代国民国家の創出を目指した日本は、早急に西洋文明を採り入れる必要があったが、それは廃仏毀釈に見られるごとく、伝統的な東洋文明の否定や日本文化の軽視を生んだ。当然、多くの古文化財が海外へ流出し始める。これを目の当たりにした彌之助が、何としてもこれを防がなければならぬという強い信念をもつようになったことも、静嘉堂文庫誕生の大きな理由の一つであった。

最初に彌之助が魅入られたのは刀剣であった。その蒐集は明治十年(一八七七)ごろから始まったらしい。これは古典籍の蒐集に先立って始められた節が強い。もちろん刀剣の美に彌之助が深く心を動かされたためであり、土佐の郷土の家柄に生まれたがゆえに刀剣に対して特別の感情と哀惜の念を抱いていたためであろう。

しかし、徳川幕藩体制が崩壊し、近代国家の誕生とともに廃刀令が敷かれ、刀剣が社会的あるいは経済的価値を失って市場にあふれていたことも、与かって力あったらしい。当時彌之助は兄彌太郎のもとにあって、月給を給付される部屋住みのような立場であったことを考えれば、高価な美術品は初めからあきらめざるを得なかったであろう。その後、刀剣から茶道具などの工芸、絵画、書跡を中心とする古美術品の蒐集へ展開拡大していくことになる。この間の事情を、『岩崎彌之助伝』は孝子夫人の言葉をもってつぎのように伝えている。

彌之助の長男岩崎小彌太の夫人孝子は『父は美術品を、一度に長持一杯

買はれることがあつた。始めは自分の鑑賞よりも、国の宝が外国へ流出するのを防ぐために集めておられたが、段々本格的になられたと聞いてゐる。沢山買はれたので、本家の方にもお分けした」と述べてゐる。

ところで「静嘉堂」とは、彌之助が籠もつた書斎の号である。これは五經の一つにして、彌之助が中国最古の詩集である『詩経』の「大雅」既醉篇にある「籩豆静嘉」という言葉から採られている。「籩豆静嘉」とは祖先の靈前にお供え物が立派に整つてゐることを意味する。しかし私は、国民全体の祖先の靈前に、立派な古文化財や古典籍のコレクションを供えたいという願いを込め、彌之助が成斎と相計つて決めたものにちがいないと考えている。

彌之助は朝倉屋久兵衛や斎藤琳瑯などの古書肆から購入したが、できるだけ個人の蔵書をそのままの状態で遺すように、散逸させないように心を配つた。また、入手困難な重要古典籍は写本を作らせて、その充実を図つた。これらの集書事業に重野成斎が深く関与したことは言うまでもないであろう。もし成斎がいなかったら、どのように彌之助が孤軍奮闘したとしても、成就することはなかったにちがいない。詳細は不明ながら、成斎の果たした大きな役割を見逃すことは、絶対に許されないであろう。静嘉堂文庫長を長らくつとめた漢学者・米山寅太郎氏によると、十四件の集書プロジェクトが挙げられているが(註3)、つぎの四件をもつて、とくに彌之助成斎四大集書と呼びたい誘惑に駆られるのである。

① 青木信寅旧蔵書(国書二四三部 一一六八冊)〈明治二十七年〉

青木信寅(一八三五〜八六)は名古屋藩出身。明治初年、判事となり、後年、函館控訴院長となつた。早くから古書の鑑識を学び、文学にも造詣が深かつたため、蔵書には重要文化財『徒然草』、同『平中物語』など、日本の古典の貴重書が多く含まれている。

② 中村敬宇旧蔵書(和漢書一七三一部 一四九二〇冊)〈明治三十一年〉

中村正直(敬宇 一八三二〜九一)は、漢学・蘭学・英語を身につけ、東京帝国大学および静岡学問所の教授となつた、近代を代表する啓蒙思想家。英国のサミュエル・スマイルズ著『自助論』を『西国立志編』として翻訳し、当時の社会に多大な影響を与えたが、その自筆稿本十一冊

もこの蔵書の中に含まれ、翻訳の過程をたどることができる。

③ 色川三(中)旧蔵書(和漢書一四三四部 六五一七冊)〈明治三十七年〉

色川三(一八〇一〜五五)は常陸国土浦の人。家業の菓種業・醬油製造業に従事する傍ら、書籍の蒐集に努めた。歴史家・中山信名の著述稿本を全て収め、その蔵書は古文書・古記録、軍記に富む。また多くの友人たちと交わした手紙を纏めた書簡集は、幕末の世相を伝える貴重な資料となつてゐる。

④ 清国・陸心源旧蔵書(漢籍四一七二部 四三九九六冊)〈明治四十年〉

陸心源(一八三四〜九四)は、帰安(浙江省呉興県)出身の武人であったが学問を好み、清末四大蔵書家の一人に数えられる。殊に、貴重書中の貴重書といわれる宋・元版を多く蒐集し、その書斎を「皕宋楼」と名づけた。別に、明以後の珍書と名家の手抄本を蔵した「十萬卷楼」、通行本を収めた「守先閣」がある。陸心源没後、清末の動乱の中でその遺書の保持に苦しんだ遺族から売却の希望が寄せられ、幾度も確認、交渉を経た後、購入が決定された。蔵書中、重要文化財十八点にのぼり、『周来』、『呉書』、『歴代故事』など、天下の孤本ともいふべき極めて貴重な本も多く、静嘉堂文庫蔵書中、最も主要なコレクションとなつてゐる。

この陸心源旧蔵書が静嘉堂文庫へ収められる経緯については、成斎自身の言葉が遺されているので、煩を厭わず引用しておきたい。このような成斎の審定と決断が、ほかの集書の場合にも行なわれ下されることによつて、その計画が滞りなく進捗したと想像されるからである。

男爵の珍藏に帰したる陸心源の皕宋樓叢書は、心源の裔にして上海にある某が我国宮内省にお買上げを望み居ると聞き、田中宮相(光顕)に会ひてその内意を叩きたるに、種々事情ありて俄かに決しがたき模様なるに、改めて彌之助男にその事を諮りたるに、男は即座に同書の鑑査を余に託されたれば、余は洋行の途次上海に立寄り、陸氏に会して示談を試み、十二万円にて買入ることに決したり。この叢書は歴史、文学、地理、科学等をつめたものにして、全く稀有の珍本なれば、男はやがて篤学の士に随意閲覽を得せしむべき考へなりと語れるが、余は唐書

に巨万の資を投じて惜しまざるは、男に非ざれば能はざるところなりと感ぜり。

もつとも成斎の弟子であった館森鴻の「重野成斎先生の逸事」には、成斎の『国史綜覧稿』について、つぎのごとく述べられているそうである(註4)。ここに出る小澤守拙も成斎に学んだ漢学者で、静嘉堂文庫主事をつとめたことがあったらしい。守拙が集書に尽力したことは確かであろうが、師成斎の意を体して行動したのではないだろうか。少なくともこれをもって成斎の貢献を否定することはできない。集書事業の中心にいたのは、これから述べるがごとくあくまで成斎だったはずである。

経費は岩崎男爵之を補助せり。岩崎男爵は参考書は何程にても購求せらるべし。代金は私一人にて引受くべしとのことにて、小澤守拙(隆八)に命じて必要の書を蒐めてゐる内に、歴史に無関係のものにて珍重すべき書も多く集れるを、岩崎男爵は却つて大いに喜び、遂に小澤を上海に遣はして購書せしめた。これが静嘉堂文庫の権輿である。

## 一一

『岩崎彌之助伝』に「彌之助は、明治二十五、六年頃、恩師重野安禪の修史事業に資するために、図書の蒐集を始めた」とある。この明治二十五年(一八九二)をもって、静嘉堂文庫の開設の年とされているわけである。しかし彌之助はこれを開設しただけでなく、いつか公開したいものと思っていた。明治四十一年(一九〇八)、彌之助は五十七歳で幽明界を異にしたが、その三周忌の際、成斎が仏前に手向けた七言絶句「樹徳院殿三周忌辰に一詩を奠す」が遺っている。冒頭に掲げたのがそれであるが、言うまでもなく「樹徳院」は彌之助の法号である。これは読み下しだけが、つぎのような詞書きとともに『岩崎彌之助伝』に載っているもので、私はもっぱらこれを利用してもらってきた。

君寝疾前、予に言つて曰く、僕の志は文庫の公立あることは、先生の知るところなり。請ふ、先生、さらに四、五年を待てと。予これを領く。

今や則ち已むも、なほ云云するもの如し。情やむを得ざるなり。

しかし今回、静嘉堂文庫に所蔵される『成斎先生遺稿』十五卷八冊を改めて閲覧したところ、その巻十五に詞書きを含め、原詩漢文のままで収録されていることを知った。とくに指摘すべきほどの異同はないが、『岩崎彌之助伝』の書き下しでは「香一瓣」となっているところが、「香一瓣」となっている。『諸橋大漢和辞典』によれば、「瓣」には複数の意味があるが、この場合は「はなびら。花片。辨に通ず」とある第四義にちがいない。したがって、一般に多く用いられる「辨(弁)」に「瓣」を变えることも許されてよいであろう。しかし『諸橋大漢和辞典』には「瓣香」という項目があつて、「形が花瓣に似た香。もと禪僧が人を祝福する時に焚いたもの。転じて、人を欽仰するに用ひる」と説かれている。おそらく成斎が彌之助三週忌に心をこめて供えたのは、この瓣香であつたにちがいない、そうだとすれば原詩のまま「香一瓣」とする方がよいのではないだろうか。

ここで重野成斎が述べているのはあくまで文庫、つまり図書館だが、彌之助は蒐集した美術品を公開するべく、美術館の建設を夢見ていた。それも一丁倫敦とたたえられた丸の内に開設することを心に誓っていた。丸の内は三菱の主導のもと、いや、ほとんど彌之助の主導のもと、近代日本を牽引する中心都市東京の中心として、とくに経済部門を担う中核として発展する準備を整えつつあつた。そこに彌之助はミュージアムをオープンさせようとしていたのである。

かの日本近代建築の父と尊敬されているジョサイア・コンドルによる「丸の内美術館 平面図一・二階」(三菱地所株式会社蔵)が遺されている。それは明治二十五年ごろと推定されるという(註5)。これは設計平面図であるが、これ自体すぐれた美術品が有する気品と端正なバランスをそなえていることに、私は深く心を動かされるのである。しかし先の成斎の詩を思い起こせば、美術館とは別に、彌之助が図書館の建設も考えていた可能性もあるのではないだろうか。

これらを根底で支える思想として、米国の鉄鋼王と呼ばれた大富豪アンドリュー・カーネギーの経済哲学があつたことは見逃せない。弱冠二十一歳に

して、明治五年（一八七二）米国に留学した彌之助は、カーネギーの思想哲学からきわめて大きな影響を受けていたのである。カーネギーの著書に「The Gospel of Wealth」（一八八九年）がある。これが伊藤重治郎により『富の福音』と訳され、ごく一部が省略された形で実業之日本社から出版されたとき、彌之助は長文の序を寄せてオマー・ジユを捧げているのである。

カーネギーの思想哲学を一言でいえば、「富めるものは、それを広く社会に還元しなければならない」というものであった。その一つとして、裕福なものは美術館を開設公開して、人々の美意識を高める義務があると書かれている。序文を寄せた彌之助は、もちろんこれを知っていて、大いに啓発され、実践に移そうとしたにちがいない。これこそ彌之助が、丸の内美術館をつくらうとした直接的要因だったといつてよいであろう。過日、ようやく『富の福音』を書架に収め得た私は、彌之助の序文を含めて通読した結果、これを確信するに至ったのである。

この詩を彌之助に手向けた重野成斎は、帝国大学文科大学（のちの東京大学文学部）教授と、わが国正史の史誌編纂掛委員長をつとめるとともに、真摯に国史編纂に打ち込んだ、明治時代を代表する歴史学者である。一般的に、名の「安禱」をもって呼ばれるが、私は尊敬を込めて、また漢学者としての仕事にも惹かれて、号の「成斎」で呼ぶことにしている。成斎は史料に基づく実証主義を唱えて、近代史学の基礎を確立した研究者としてたたえられている。

十八歳のとき、兄彌太郎から誘われて大阪に出た彌之助は、成斎の私塾である成達書院に通って学問を修めた。やがて成斎は学者として高い評価を得、社会的にも活躍することになるのだが、親しかった久米邦武が起こした筆禍事件のあと帝国大学と史誌編纂掛委員長を辞職することになる。成斎の伝記については、『重野博士史学論文集』上巻（註6）の最初に載る小牧昌業撰「東京帝国大学名誉教授従三位勲二等文学博士重野先生碑銘」により、大体の輪郭を知ることができる。それに続く門下生・西村時彦の「成斎先生行状資料」は、五十一ページにわたるきわめて詳細な伝記である。

久米邦武は明治初期、岩倉遣外使節団に加わり欧米を視察、記録係をつと

めて『特命全権大使米欧回覧実記』（註7）を編纂し、成斎とともに帝国大学文科大学の教授もつとめた歴史学者である。あの感動的報告記の著者なのだ（註8）。もちろん、成斎と同じく実証主義者であり、明治二十四年（一八九一）、『史学会雑誌』に「神道は祭天の古俗」を発表した。神道は天を祭る古くからある風俗の一つだとして、当時の神道における蒙昧を批判したのである。すると神道家や国学者から激しい攻撃が沸き起こって、久米は帝大教授と史誌編纂委員を依願免職となり、雑誌も発禁処分を受けたのであった。

私は『明治文学全集』（註9）によって「神道は祭天の古俗」を読んでみた。それはやや難解であるものの、神道の誕生と展開を論じ、歴史的性格を考究して余すところがない。とくに仏教や陰陽道との比較を通して、つまり比較歴史学という方法論を用いて神道の特質を明らかにしている点が興味深かった。松島栄一氏が指摘するとおり、「史実を考え、故実・習俗を整理・分析して、神道を科学的・合理的考察のもとにおこうとした意欲的な論文」なのだ。しかし現代からみれば、基本的に日本神国論的スタンスで執筆されていると言つても過言ではないであろう。

このような論文が攻撃の対象となつたのは、なぜなのだろうか。松沢裕作氏によると、日本に神道がありながら、儒教・仏教の導入が必然であったとする久米の主張が、神道の不当評価と受け取られたためだという（註10）。また現在神道を崇敬するものを、「至愚の所業」「阿房の仕事」とする主旨を「裏面に蓄蔵」しているという、言いがかりともいえるような非難もあつたらしい。さらに「公然たるテロの脅迫」にまで進むような論説まで発表されたという。

しかしいづれにせよ、成斎はその久米論文とまったく無関係であつたように思われる。久米は「余の見たる重野博士」という一文において、「無謀の武断に逢て悲境に陥られた」先輩成斎へ同情する気持ちを吐露しているのだが、それは成斎の関与がなかったことを証明しているのである。

もっとも松沢氏によれば、成斎をはじめとする帝国大学国史科の同僚たちは沈黙を守つたという。これは久米を擁護する側から問題視され、たとえば『東京朝日新聞』は三月九日の社説で、成斎および同僚であつた星野恒は名指して批判された。しかし少なくとも成斎の場合、これまで自分が発表して

きた論文や主張を振り返り、社会の趨勢を思い浮かべたとき、みずから久米を擁護することが、かえって久米を苦しませ、窮地に追い込んでしまう可能性を考えたのではないだろうか。たとえ保身がまったくなかったわけではないとしても、他人がとやかく言うべきことでないであろう。社会の公器である新聞はともかく、行なった行為ではなく、何もしないという行為を批判することは無責任であり、慎重であるべきなのではないだろうか。この点だけを取り上げて、成斎を非難しようとは思わない。

しかしこのような批判が浴びせられるだけではなく、やがて成斎が攻撃の対象となっていた。すでに成斎は史料などにより実証できない歴史的事件や人物を、少なからず否定していたために、「抹殺博士」の異名をとっていた。これを快く思わない歴史家が多かったのだが、児島高德の实在を歴史から抹殺していたことなどが蒸し返されるようになったのである。高德は隠岐に流される後醍醐天皇を救出しようとした南朝の忠臣で、神社の祭神ともなっていた。これを大きな視点から見ると、これまでの帝国大学系歴史家たち全体が批判にさらされるとともに、これに取って代わる新しい「官学アカデミズム」が興ろうとしていたという社会背景もあったという。

その中心に位置したのは、のちに歴史学界を主導することになる三上参次で、これに続く黒板勝美や辻善之助らにより、史料編纂掛（のちの東京大学史料編纂所）と東京帝国大学文科国史科を中心に、「官学アカデミズム」が形成されていくことになるのである。松沢氏の『重野安繹と久米邦武』からは、このような我が国歴史学の大きな潮流を学ぶことができ、大変興味深くまたおもしろかった。

### 三

かくして帝国大学の修史事業は抜本的に見直されることになった。史誌編纂掛は廃止され、成斎は委員長と帝大教授の職を解かれたのである。荒唐無稽な興味本位の歴史書を否定し、客観的事実をなによりも重視し、最後までそれを曲げることもなかった成斎の心中や、いかばかりであったろう。先の

「成斎先生行状資料」には、「意見を發表するに当りては、自己の地位を犠牲に供するも顧みざるの気概あり」という『読売新聞』記事の一節が引用されている。学者としての真摯な生き方に、深く心を動かされる。その一生を知ったとき、成斎に対する尊敬の念が、いや増すのを覚えないではなかった。

これに対し、日本近代史学研究者の松沢氏は、やはり成斎を客観的に観察している。氏によれば、日本の歴史学は、その黎明期から過去の事実を明らかにするという営みはどのようにして社会的に有用であるのか、という緊張関係のなかに置かれていた。しかし成斎と久米は、いささか無頓着にその緊張関係のなかに飛び込んでいったというのである。しかし私には、成斎をこのように突き放してみることがどうしてもできない。それを率直に告白せざるを得ない。

久米邦武筆禍事件が起こったのは明治二十五年（一八九二）、成斎が辞職したのはその翌年のことである。すでに述べたように、彌之助が恩師成斎の修史事業に資するため、図書蒐集を始めたのも、明治二十五、六年のこととされている。つまり、成斎の辞職とほとんど同時に、あるいは若干先立って図書収集が開始されたのである。あるいはまさに久米事件のはじまりとともに、彌之助は典籍の収集に着手したといってもよいであろう。

近代産業の進むべき道を的確に見出し、三菱を発展繁栄させることに成功した彌之助には、久米事件の帰着するところも予見できたのではないだろうか。より一層はつきりといえは、やがて成斎が辞職せざるを得なくなること、少なくとも大きな困難に直面することが、彌之助の慧眼には映っていたのではないだろうか。もともと『岩崎彌之助伝』には、地方改良運動に尽力したという政治家・土田右馬太郎の「恩師重野先生の内面観」（『南国史叢』三二）から、つぎのような一節が引かれている。

先生も吏官を罷めて家居するに至つたが、修史は先生生涯の大事業であつたので、これが為にならぬことを邦家の恨事となし、自邸に野史亭を開き、学者を聘して引続き修史に従事した。さりながら費用多端に苦しみ、遂に筆を載せて諸国を遊歴し、潤例（潤筆料）を設けて文を売り、字を鬻いで私選の費に供した。男爵岩崎彌之助翁、これを聴き、先生を

して専心その事業に当たらしめんと欲し、巨資を投じ、次いで野史亭を翁の静嘉堂に移した。

これによれば、少なくとも成斎の野史亭を静嘉堂に移して成斎を文庫長に招聘したのは、明治二十五、六年より遅れることになり、彌之助による典籍蒐集の始まりも同様の可能性がある。根本史料を欠いているため、詳細は知り得ない。しかし私は『岩崎彌之助伝』の記載を採用したいと思う。彌之助には久米事件の帰趨が予測できていたように思われてならないのである。あるいはもつと早く、彌之助が不安を感じた可能性もあるのではないだろうか。だからこそただちに図書収集を開始したのである。言うまでもなく、それはひとえに恩師成斎に対する尊敬の念に端を発するものであった。たとえ土田右馬太郎の説を採って、実際に成斎が困窮するようになってからのことだとしても、成斎に対する衷心からの謝恩という結論はいささかも変わらないのである。

彌之助が駿河台東紅梅町にあった自邸に文庫を造り、文庫長として成斎を招いたのは、先生に対する謝恩の気持ちの形にしたものなのだ。彌之助が古典籍を精力的に収集したのも、先生の学恩に報いるためだったのだ。私はそこに、彌之助の師成斎に対する純粹なる尊崇、無私の尊敬を読み取りたい。

東京帝国大学教授も史誌編纂掛委員長も辞職した、あるいは辞職することが予想された成斎を援助したところで、彌之助にとって社会的名誉や実利は何も期待できなかつたであろう。それどころか、彌之助自身成斎一派と見なされ、久米事件に巻き込まれてしまう危険性さえあった。むしろ成斎のあと、新しく帝国大学文科大学に設置された史料編纂掛や、その主任となった三上参次を援助すれば、彌之助は名誉や実利をいとも簡単に手に入れることができたにちがいない。

しかし彌之助は、そんなことをするような人間ではなかつた。身の危険を冒して、山口昌男にならつていえば「敗者」である恩師成斎を救つたのである。それは『童子教』に出る教え「七尺を去りて師の影は踏むべからず」を守つたというような、単純な道徳の問題ではなかつた。恩師に対する、純粹無垢なる尊崇の念に発するものだったのである。

飯島虚心の名著『葛飾北斎伝』の巻頭には、漢文の序文が収められている。最近私は、その序文を成斎が認めていることに気づき、驚くとともにさらに成斎に親しみを感じるようになった。言うまでもなく『葛飾北斎伝』は、北斎を研究する際もつとも重要な一書である。これまで幾度となく『葛飾北斎伝』をひもといたはずだが、成斎の筆であることはもとより、序文の存在さえ認識することはなかつた。静嘉堂文庫美術館につとめるようになってから、はじめて目に入ったのである。人間は無関心なら見ても見えず、自分に関係することしか認識することはできないという真理が、はじめて腑に落ちたのだつた。

これは序文として力のこもつた名文であると思う。加えて成斎の書が実にすばらしい。四半世紀近く前、鈴木重三氏は『葛飾北斎伝』に脚注と解説を付して一書を著わした(註11)。鈴木氏は成斎の序文を読み下しにしたが、そのあと続けて原文を影印にして掲げている。その書の美しさに惹かれ、書き下しだけでは満足できなかったにちがいない。

最後に『成斎先生遺稿』巻十三から成斎の面影を髣髴とさせる七言絶句「野航亭晚酌」と、同じく巻十五から、明治四十二年(一九〇九)初夏、前年に亡くなった彌之助をしのんで詠んだ七言絶句を掲げて筆を擱くことにしよう。

#### 野航亭晚酌

欲論世事已忘言

世事を論ぜんと欲して已に言を忘る

嫩竹房櫳対緑樽

嫩竹 房櫳 緑樽 対す

小泛明朝卜新霽

小泛 明朝 新霽を卜う

鳥鳥声喜夕陽邨

鳥鳥の声 喜々とする夕陽邨(註12)

己酉四月三十日、高輪岩崎氏第にて牡丹を観る。樹徳君を懷故する有り。愴然として一絶を成す。

輪台高閣水連天

輪台の高閣 水 天に連なる

万卷圖書手沢新

万卷の圖書 手沢新たなり

更有傷心遺愛在

更に傷心遺愛 有らば在れ

牡丹滿塢殿殘春

牡丹 塢に満ちて殿 春を残す(註13)

(註1) 学問の道平素より君と一緒に歩んだが、はや龍に乗り天帝の御殿の門まで飛んでいった。病をおして一柱の香三回忌にて手向けつつ、祈ってやまず約束の文庫が公開される日を

(戯訳)

(註2) 岩崎彌太郎・岩崎彌之助伝記編纂会編『岩崎彌之助伝』上下(同編纂会発行、一九七二年)

(註3) 米山寅太郎「静嘉堂文庫の沿革」(『静嘉堂文庫宋元版図録 解題篇』汲古書院、一九九二年)

米山寅太郎・増田晴美・成澤麻子「静嘉堂文庫の古典籍」(第三回 日本の貴重書)(『静嘉堂文庫』一九九八年)

(註4) 『南国史叢』第三輯(一九三八年五月発行)に載るそうだが、未だ確認するに至っていない。

(註5) 阿佐美淑子「美術館と劇場 三菱が丸の内に見た夢」(『三菱が夢見た美術館 岩崎家と

三菱ゆかりのコレクション』カタログ、三菱一号館美術館、二〇一〇年)

(註6) 薩藩史研究会編『重野博士史学論文集』上巻(『版權所有者 重野紹一郎』雄山閣、一九三八年)

(註7) 久米邦武『特命全権大使米欧回覧実記』一〜五(『岩波文庫』(岩波書店、一九七七年、

一九八二年)

大久保喬樹『現代語縮訳 特命全権大使米欧回覧実記』(『角川ソフィア文庫』(角川書店、二〇一八年)

(註8) 高田誠二『久米邦武 史学の眼鏡で浮世の景を』(『ミネルヴァ日本評伝選』(ミネルヴァ書房、二〇〇七年)

(註9) 松島栄一編『明治文学全集78 明治史論集2』(筑摩書房、一九七六年)

(註10) 松沢裕作『重野安禪と久米邦武 「正史」を夢見た歴史家』(『日本史リブレット人082』(山川出版社、二〇一二年)

(註11) 飯島虚心著・鈴木重三校注『葛飾北斎伝』(『岩波文庫』(岩波書店、一九九九年)

(註12) 世を論ぜんと思つたが特に言うべきこともなく、格子窓から若竹を見つつ酒樽抱いている一杯やりつつ明日の朝雨があがるか占つた「鳥やカラスの声響く夕日の村」と卦が告げた (戯訳)

(註13) 高輪台の岩崎邸天に連なる池の水 万巻の図書部屋に満ち君の手沢も新たなり 我が傷心と君の愛かくも深きを知らぬ氣に 堤に牡丹咲き乱れ高殿春を残して (戯訳)